

水資源の社会リスクとコンフリクト Social Risk and Conflict in Water Resources Planning

○ 萩原良巳・坂本麻衣子
○ Yoshimi Hagihara, Maiko Sakamoto

The conflict on water resources happens not only because physical aspects, for example the change of patterns of rainfalls, have some problems but also society itself has some problems. The conflict on water resources should be recognized as a risk which social system involves. Water resources conflict has a possibility to happen in any parts of process of water resources planning, and results of planning mainly influence people who live around the targeted region. In this sense, water resources planning should be an adaptive system which includes the conflict management as a pre-step of final decision making.

1. はじめに

世界的な水不足が懸念されてから久しく、またこれに伴った水争いの頻発も広く危惧されてきた。水資源をとりまくコンフリクトは今後避けられない社会的問題である。降水量の変化といった物理的背景、水需要形態の変化といった社会的背景などを契機として、水資源をとりまくコンフリクトは社会に表出し得る。このようなコンフリクトの発生は社会的リスクとしてより広く認知されるべきであり、リスクであるからにはこれを従前からマネジメントしていくという認識を社会で共有することが重要である。水資源をとりまくコンフリクトに係わるステイクホルダーの社会的リスクの総和を最小とすべくコンフリクトマネジメントに取り組むことが今後肝要であると考えられる。

2. 適応的計画方法論としての

水資源コンフリクトマネジメント

水資源コンフリクト問題は計画の立案から意思決定までの間に発生する可能性があり、水資源開発計画に対して社会が抱えるリスクのひとつとしてコンフリクトを認識することができる。水資源計画は公共の目的を持ち、その結果は地域の生活者に還元される。そして、その生活者は多様な価値観を持つ集団であり、また、その価値観は時間の経過に伴って変化する。昨今の計画の策定プロセスにおける生活者参加の機運の高まりから、このような地域生活者の多様な価値観を計画に反映することが今後ますます望まれるようになるだろう。様々な価値観を有する人々が計画に関わるようになれば、彼らの中で意見の衝突が起こることになる。したがって、水資源開発計画は、従来の

システムズ・アナリシスの手順¹⁾に新たに分析を加え、さらに意思決定の直前にコンフリクトマネジメントを位置づけた適応的計画方法論として捉えることが必要となる。

3. 国内の水資源コンフリクトの事例

川辺川ダムは熊本県南部を流れる一級河川球磨川右支川の川辺川に建設予定のダムであり、1966年に計画立案された。以来、行政と地域生活者、特に農家、漁協との間でコンフリクトを展開し、2003年には農家が起こした利水訴訟で国側の敗訴となった。農林水産省と県は川辺川の整備計画において利水計画を見直さざるを得なくなった。しかしながら、図1の事業費の負担割合から明らかのように、川辺川ダムは殆ど治水ダムなのである。現在進行しているコンフリクトを一見すると、利水に関するコンフリクトが問題の行方を握っているようにも窺える。このような川辺川ダム建設コンフリクトの構造と、国内の水資源コンフリクトが抱える問題についての考察を示す。

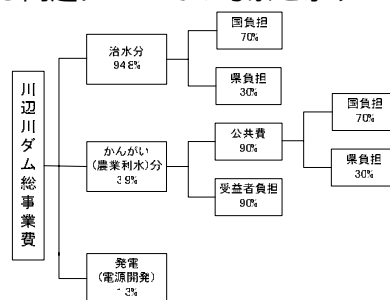


図1 川辺川ダム総事業費の内訳²⁾

参考文献

- 1) 吉川和広:最新土木計画学 計画の手順と手法, 森北出版, 1975.
- 2) 熊本日日新聞記事, 2004年11月10日.